

第五章 萩の亂討伐

一、萩の亂及出征

明治九年十月より十一月に亘り、長州萩に前原一誠の亂あり。吾聯隊に對して征討の令降り、風間少佐(茂)第一大隊を率ゐて、之に向つた。之を以て吾聯隊の初陣とする。前原一誠は、吉田松陰門下に在りて、久阪玄瑞、高杉東行と並び稱せられたる人物であつて、松陰嘗て彼を評して、勇あり智あり、誠實は人に過ぐ、才は久阪に及ばず、識は高杉に如かざるも、其の人物の完全なることは、兩人亦前原に及ばずと嘆賞した程である。斯かる人物が、如何して亂を起したかと云ふに、其は恰も西南戦争の原因が、西郷隆盛と大久保利通との衝突に在つたが如くに、萩の亂の原因は、前原と木戸孝允との、不和に基づく稱して過言でない。然れば其の舉兵の理由は、失政を矯めんとする一種の政治運動であつて、謀反など云ふものとは意味が違つて居る。それ故前原一誠は、其當時は賊名を蒙つたが、後日之を除かれ、舊功に依て贈位の恩典にさへ浴するに至つたのである。

(29)

1786

前原が兵を萩に擧げたのは、十月二十八日にして、二十四日敬神黨(俗稱風連)が熊本に起つたのを聞き、之に呼應して起つたのである。然しながら、要するに島合の勢にして、其の兵力等も明確には分らないが、當時は佐賀・熊本・秋月等の諸地方に、此種の内亂が頻發する時代であつたから、騒ぎは存外大きい。政府は直ちに廣島鎮臺歩兵第十一聯隊(大隊)に對して、出征を命ずると共に、吾第三大隊に増援の命が下つた。乃ち十一月一日風間少佐は部下二中隊を率ゐて大阪を發し、海上を急行して、三日午前四時三田尻に上陸し、陸路山口に到つて、廣島鎮臺司令長官三浦少將(樞)の線下に入り、殘餘の二個中隊及び砲兵一小隊は、翌四日山口に到着した。

二、萩及生雲の戦鬪

三日夕山口に到着するや、直ちに生雲に派遣の命を受け、風間少佐一中隊を率ゐて先發し翌日到着の分一中隊を、更に之に後續せしめ、一中隊は山口に駐つて同地を守衛し、一中隊は萩征討隊の軍に加へられた。仍て五日官軍は、三道より分れて萩に逼るべく、左の如く進撃の部署を定めた。

(30)

1787

本隊(山口の二中隊、廣島の二中隊)は、本道より大橋を渡り、萩の市街を衝いて、松本に出で、小畑より大井に至り、阿武川を隔て、陣す。

左翼隊(音一中隊にして、大照院に向ひ、敵を追撃して松本に向ふ。

右翼隊(二中隊)は、河上より上野を過ぎて、松本に出で、黒川に向ふ。

此夜月色微明、爲谷より萩の陣地を望むに、賊徒數所に屯集して、官軍の散兵と對峙す。仍て一砲車を觀音橋頭に進めて、五七發を見舞ひ、翌六日拂曉三浦少將、本隊を率ゐ、左

右兩隊も之と連絡して前進し、吾が中隊は未明軍艦の合圍と同時に、御城山の下に上陸し、中隊を二隊に分ちて、一は中の總門より敵の根據地たる明倫館に、一は平安古總門より、

八町街に進入したが、此時既に敵兵四散して隻影を認めない。諸隊は直ちに追撃に移り、吾中隊は萩に駐まりて、本營(山口に移る)明倫館及び萩市街の警備に任じた。

一方生雲口に派遣せられた吾が二中隊は、四日板谷に到り、五日奥三谷村に屯し、六日拂

曉津和野・生路の兩路より分進し、其の津和野道を進める者は、鷹巢峠を登らんとして敵

の抵抗に會ひ、撃つて之を破り、其の一は三谷の先き猶堂と稱する山間より進み、持坂に至つて兩隊と合した。又生雲道に向へるものは、宿毛越の山頂に出で、一は正面より一は

背面より、迂回して合戦し、天子中村を越えて生雲に逼りたるに、敵兵潰亂して火を生雲に放ち、須佐方面に走つたが、此時秋を破れる官軍、長驅して既に須佐に在り、殘兵相合することを得ずして、終に慘澹たる大敗を招くに至つた。

此日の戦間に、兵卒山本倉五郎負傷す。是れ實に吾聯隊に於ける戦傷死者の最初である。

八日生雲の諸隊、山口に引揚げ、同月二十一日に大阪へ凱旋した。

(32)

1789